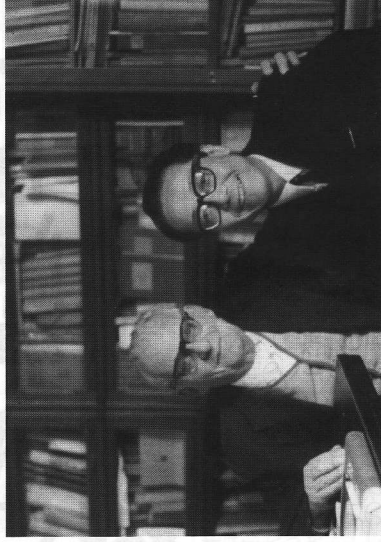


山下肇先生を偲ぶ

中澤英雄



プロトを訪問した47歳の山下先生

山下肇先生が二〇八年一〇月六日、心不全でお亡くなりになった。享年八八歳であった。山下先生の名は、今も書店で販売されている何冊もの翻訳書の訳者としてドイツ文学関係者以外にもよく知られていることと思

う。しかし、山下先生に直接教わったり、あるいは同僚として接した方は、駒場の中でもおそらく多くはないであろう。私は駒場在学中に先生の書陵に接した一人である。山下先生は一九二〇年（大正九年）生まれであるから

まさに戦中派世代であった。先生は一九四二（昭和一七）年九月に東京大学文学部独逸文学科を繰り上げ卒業し、十月に陸軍に志願。まる三年の軍隊生活の多くを北海道で過ごされた。

先生は、一九四六（昭和二一）年に旧制浦和高校の専任講師に、四九年に一九歳の若さで東京大学助教授に就任された。その後、ドイツ語の教育、ドイツ文学の研究・教育・翻訳で活躍なさったばかりではなく、ご自身を日本戦没学生記念会（わたつみ会）の事務局に提供し、事務局長として長年平和運動にも携わった。六〇年に教養学部教職員組合を結成し、東大生協の副理事長も務め、九〇年には大学生協・東京事業連合会の理事長に選出された。七一〜七二年には教養学部部長の重職を担ったが、学部部長時代に駒場キャンパスに保育所を設置させた。東京大学を八一年に定年になられたあとは、九一年まで関西大学文学部で教

鞭を執られ、関西でも多くの独文研究者をお育てになった。八三年にはエルンスト・プロットの『希望の原理』の監訳、九二年にはゲートの『アウスト』の翻訳により、二度の日本翻訳文化賞を受賞なさっている。二〇〇六年には念願の「わたつみのこえ記念館」が本郷に完成し、その館長に就任された。

先生の学問的業績は上記二つの訳業以外にも膨大で、この小文はとても網羅しきれないが、私の個人的な思いも含めながら、その一部を紹介させていただく。

先生は六七年四月（六八年三月に西ドイツ（当時）マールブルク大学で在外研究をなさり、帰国後に評議員として東大紛争に直面された。私は紛争が終了した六九年に教養学部ドイツ分科（当時）に進学した。しかし七〇年に山下先生のドイツ文学演習の授業を受けた。そのとき読んだのは、ハイネの『バックスラップのユダヤ司教』という、中世のユダヤ人を主人公にした小説断片であった。先生は

その当時、ドイツのユダヤ系知識人の問題を研究なさっていて、その成果はやがて『ドイツ・ユダヤ精神史——ゲート』から『プロットパペ』（講談社学術文庫）としてまとめられることになった。先生は授業の音聞に、ドイツの古本屋でユダヤ関係の古書を買っておられたこと、その文献の整理に追われていること、ドイツから帰国する途中、イスラエルに立ち寄り、カフカ全集の編纂者マックス・プロットを訪ねたことなども話して下さった。その当時、すでにカフカを卒論のテーマにすることを決めていた私は、戦前に死んだ著作家の親友がごく最近まで生存して、目の前の山下先生と面識があったことを知って、奇妙な感慨に打たれたものである。そのプロットは、先生の語聞からほとんどして一九六八年二月に逝去し、山下先生はその四〇年後に天寿を全うされた。山下先生の学恩に感謝するとともに、先生の真傳を心から祈り申し上げる次第である。

（言語情報／独語）